

好き嫌いで めろ

元東京地検特捜部長
河上和雄



KAZUO KAWAKAMI

元東京地検特捜部長

一
和雄

き 嫌 い で 決 め ろ

学院図書館
書章

日本テレビ

KAZUO KAWAKAMI



[著者略歴]

河上和雄（かわかみかずお）

1933年東京生まれ。東京大学法学部卒業。ハーバード大学ロースクール修士課程修了。

58年検事任官。札幌地検、旭川地検を経て、東京地検検事の時にハーバード大学に留学。

76年東京地検特捜部検事としてロッキード事件にあたる。83年東京地検特捜部長、86年最高検検事。法務省矯正局長を経て、89年最高検公判部長に就任。91年退官。直木賞作家の三好徹は実兄。

現在、弁護士、駿河台大学教授、日本テレビ客員解説員。

好き嫌いで決めろ

発行日 1997年1月14日

第3刷 1997年6月1日

著者 河上和雄

発行者 戸谷 仁

発行所 日本テレビ放送網株式会社

〒102-40 東京都千代田区二番町14

TEL 03-5275-1111(大代表) FAX 03-5275-4017

印刷所 株式会社精興社

©Kazuo Kawakami, 1997, Printed in Japan

ISBN4-8203-9635-8 C0030

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

好き嫌いで決めろ 目次

◆ I

嫌いな人間・嫌われる人間	13
頭のいい「馬鹿」は困りもの	16
公言して自分を追い込む	19
下から見ると人間がわかる	21
目的意識を与えられないのはダメな上司	24
「なか抜き」するのはダメな部下	27
どんな仕事にも意義がある	30
他人は自分を評価してくれない	34
私の怒りかた	37
丁寧に喋っているつもりなんだが	41

人生は実に楽しい	44
かつこよく辞める	47
女性の能力は高い	51
自立と結婚の関係	54
ホームレスになりたい男たち	57
好き嫌いで決めろ	59

◆ II

社会が制度疲労を起こしている	65
経済は唯一の価値基準か	68
選挙システムはすべて公営で	72
マスコミは政治を動かす	74

テレビの怖さ	76
高齢化社会	80
理想の老後	84
「近ごろの若い者は」?	87
私はオウムを理解しない	89
「君もできるよ」と詐欺師麻原は言う	93

◆ III

戦争に負けてわかったこと	99
子ども時代	103
勉強をしすぎるな	106
河上流司法試験突破法	108

検事になった訳	112
検事という職業	115
三〇歳でアメリカへ行ってみた	119
刑務所で暮らしてみた	124
日本人の国際感覚	127
子どもに必要なのは適度な愛情	130
ひとつだけ言う「人に迷惑をかけるな」	133
お勉強ができて馬鹿は馬鹿	136
いざというときに出る「ひとりっ子」の癖	140
七〇すぎてもかわいらしい人	143
別れた後ほのぼのする人	147
戦略的恋愛論	151

本当に愛する相手

.....

154

結婚はタイミング

.....

157

◆ IV

田中金脈事件

.....

163

ロッキード事件・その一

.....

166

ロッキード事件・その二

.....

171

贈収賄事件は多い

.....

174

住専は「やらされた」事件

.....

177

政治と検察

.....

180

「政治家の圧力」というもの

.....

184

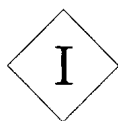
ある法務大臣は

.....

187

正義感は嫉妬心の裏返し	191
危機管理はルール・オブ・ロー	194
私の使命	197
守らなくてはならないフィクション	200
男の条件——あとがきにかえて	203

好き嫌いで決めろ



嫌いな人間・嫌われる人間



嫌いなタイプの人間は何といつても威張る人間です。役職をかさにきて無理な要求をしたり部下に過酷な労働をさせるといった人ですね。それから呑み屋などでたまに見かける、多少お金があるからといって女性店員に横柄な態度をとったりするような人間も生理的に合わない。大嫌いです。

役職が高かったりお金持ちであつたりしても威張らない人はいます。威張る人間というのは、もう性格なんでしょうね。以前、裁判に立ったとき相手方の弁護士でこんな人がいました。こちらの反対尋問のときに「なぜ一介の弁護士である〇〇弁護士に對して会社のそんな重要なことを相談したのか」と質問したんです。するとその弁護士が怒りましてね、「私はそんなじゃない」と言うんです。間違えたのかと思ひ

「あなたは顧問弁護士ではなかったのですか」と聞きましたら、「顧問だが『一介の』弁護士ではない」と大真面目で言うんですよ。思わず笑ってしまいました。

私自身若いころはずいぶん嫌われました。といつても威張るからではないんです。反抗的だったのと臆面もなく正論を言っていたのがその理由。嫌う人は徹底して私のことを嫌っていましたよ。

私の反抗的というのはと正論を吐くというのはセットになったようなところがあります。たとえば上司が何か提案したときに皆が上司の機嫌をとって賛成したりすると、ひとりだけ「でもその提案にはこんなマイナス面もあるじゃないですか」などと言つてしまう。それがどっちに転んでもいいような提案であつてもです。マイナス面が多少あるのはしかたないのだし皆が賛成しているんだから、つまらないことを言うのはやめればいいのに言つてしまう。

検察庁の同期会で飲んでいてもそう。結構いい年になつてからも「政治家の犯罪は絶対追及しなきゃいけない」とか「政治家の悪を見逃すような検事は必要ない」とか言っている。これは正論です。正論ですが、世のなかには長いものには巻かれろとい